

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 隠岐方言の特徴：合同調査の報告を兼ねて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002494">https://doi.org/10.15084/00002494</a>

## 「隠岐方言の特徴—合同調査の報告を兼ねて—」

平子 達也

それでは次の発表というか、お話に行きたいと思います。次は駒澤大学の平子達也さんです。2年続けてここに勉強に来ています。その発表をします。「隠岐方言の特徴」、ちょっとこれは題が堅いですね。「合同調査の報告を兼ねて」という、堅いんですけどたぶんお話は柔らかいと思います。よろしくお願いします。

(平子) 平子です。よろしくお願いします。こんな笑いを取れる話は私はできないですけども、僕は去年初めて隠岐の島に来させていただいて、今年11月にまた2回目です。隠岐弁というか、隠岐方言の勉強というのは本当にその2回だけしかしてない素人です。今お話を聞いていても必死でメモを取っていたぐらい素人ですけども、その中で調査をさせていただいて、調査報告を兼ねてというよりは調査の中から見えてきた隠岐方言のこういう特徴があるんじゃないかということですね。

逆に言うと、こういうところが我々としては研究をしていきたいところだよということをお話しさせていただきたいと思います。ここはもう木部先生がお話ししてくださいましたのでスキップしてもいいんですけど、去年と今年11月にそれぞれ2日間調査をさせていただきました。五箇、西郷、中村、都万の4地点で調査をさせていただきました。

調査をしたのは大きく3つのことだったんです。1つはアクセントで、今のお2人の話を聞いていても、非常にやっぱりアクセントをまねするのが我々にとっては難しいですよ。イントネーションというか音の上がり下がりというのをまねさせていただくのが非常に難しいというのと、あと単語を聞かせていただきました。隠岐方言で見られる特徴的な単語、今いろいろな単語が出てきましたけど、それも見せていただきましたし、それと同じような標準語とそんなに変わらないような単語だけちょっとずつ発音が違う、特にアクセントもですけど、というところを聞かせていただきました。

それと文法ですね。ちょっと難しいかもしれませんが、主に動詞がどういうふうな形に変わるか。例えば否定、何かを、何々しないと言うときにはどういうふうに言うのか。何々されると言うときはどうやって言うのか。何々しているというときにはどうやって言うのかということをお聞きしました。

今日の話は、最初に調査のことだけでお話をしようかなと思ったんですけど、隠岐方言というのはそれなりに古い研究の歴史がありまして、その話を少しだけさせていただきます。その後に調査で得られたデータから隠岐方言の特徴についてお話をさ



せていただきたいんです。最初にアクセントの話をしようかなと思ったんですけども、先ほども言いましたように非常に難しいというのと時間の問題がありまして、文法というか主に言い回し、表現のところに重点をおいてお話しさせていただきます。

研究の歴史としては、石田春昭さんという方が、もう 1936 年の段階で『隠岐の島方言の研究』というこういう本を出版されています。これはおそらく隠岐の方言に関するまとまった研究としては、最も古い部類に入る研究だと思います。中を見てみますと文法から発音、アクセントに至るまで非常に詳細に研究がされていて、すごいなという研究ですね。しかも隠岐のいろいろな方言、我々が調査した 4 地点だけじゃなくて島前も含めて地域差、ここの方言とここの方言はこういうふうに違いますよということにも言及をしているという。1936 年以前の隠岐の方言に関する非常に貴重な研究だと思います。

その後に 1950 年に廣戸惇という方が『山陰方言の研究』という、これも古い本ですけども出されました。これは『山陰方言の研究』と書いてあるので、山陰地方の隠岐も含めた出雲、石見、隠岐に関するまとまった研究です。

廣戸先生は実は 1949 年に『山陰方言の語法』という本も出されていますけれども、その後に大原孝道さんという方と一緒に山陰地方のアクセントに関する研究もされています。我々研究者の中では、隠岐の方言を研究するためには必ず参照しなければいけない研究の 1 つです。

今見た 2 つの研究、石田さんの研究と廣戸先生の研究というのは 1936 年、1950 年ということで 60 年以上前ですね、廣戸先生の研究でももう 66 年前の研究になりますから。そこに書かれているいろいろな方言の形が今でも残っているのかとか、また違う形に変化してないのかとか、もうなくなってしまっているものもないのかということ調査していく必要があります。

例えばこれは『山陰方言の語法』という 1949 年に書かれた本の中に、普通に命令するときは「見よ」とか「行け」とか「読め」と言うんだけど、たくさんの人に命令するときは「ミヤタレ」とか「エキヤタレ」、「ヨミヤタレ」。この「タレ」というのを付けるんだということが書かれているんです。これは皆さん、どうでしょうか。こんな言い方は聞いたことがないという方が多いのかもしれませんが。こういう言い方が残っているのかということも我々は知りたいんです。実はこの後の紹介する 1970 年代の研究では、もうすでにこの形は隠岐ではほとんど使われないということが書かれています。なので、古い研究の中に残っている言葉がどういうふうになっているかということを知りたいと。

今言いましたように 1978 年に、神部さんという方が『隠岐方言の研究』というこんな大きな本を書かれています。これは実は五箇の方言を中心にした隠岐方言に関する非常に詳細で総合的な研究で、前編と後編に分かれていて、前編は『隠岐方言の存立と特性』というタイトルですけども、隠岐方言の中のいろいろな方言に関してどういうものかと、地域差に関して扱ったところで、後編は五箇方言に関する非常に詳しい研究があります。表現、音声、語彙と分かれています。全体 800 ページを超える非常に大きな研究で、これも我々隠岐を研究する人間にとっては絶対見なければいけない研究です。

その後 1978 年にこの本が出た後、隠岐の方言に関してまとまった研究というのはなかなか見当たりません。単発的にあることはあるんですけども。ただ、アクセントに関する研究はずっと今に至るまで盛んに続いています。

三型アクセントという、ちょっとあまり詳しくお話はできないんですけども、アクセントを持つことで隠岐方言というのは知られていまして、国内ではこの三型アクセントというのは、琉球列島の方言を除けば福井県の一部に見られるだけの非常に珍しいアクセントです。実は福井にあるということは最近分かったので、それまではこの琉球以外では三型は隠岐にしかないといわれていて、みんなこぞって隠岐にアクセントの調査に来ていたという時代があります。この合同調査にも参加された上野善道先生や、松森晶子先生のご研究があります。

じゃあ、これだけ、一応偉業と言っては変ですけども、こんな分厚い研究書も出ていてこれだけ研究の積み重ねがあるんだから、それを読めばいいんじゃないのと言われるかもしれないんですけど、なぜ今隠岐方言を調査し研究する必要があるのかというと、僕としては2つぐらいの理由を思い浮かべます。

1つは、当たり前なことなんですけれども、研究がまだまだ十分ではないからという単純な理由です。石田春昭さんとか廣戸先生の研究というのは断片的ですね。全部まとまった研究ではないというところがあります。現代の研究者が知りたいことが全部書かれているわけではないですから、その穴を埋めなければいけないというのと、神部先生のこの分厚い本は非常に詳しい研究ですけども、ただ五箇方言が中心ですからほかの方言ではどうなのか。隠岐の中のほかのところではどうなのか。特に島前の方ではどうなのかということが分からないままになっています。

さらにもう1つは、昔と今では方言が変わっているかもしれないから。当然変わっているんだろうと思います。この神戸先生の研究でももうすでに40年近く前の研究になりますから、今残されている方言がどういうものなのかということを知りたい。もちろんなるべく古い形も知りたいんですけども、今どういう言葉を皆さんが話されているのかということを知りたい。先ほど木部先生から少しだけお話がありましたけど、日本中の方言がいわゆる危機、このままなくなっていくかもしれないというところにありますので、なるべく早くなるべくたくさん調べたい。

昔の隠岐の方言からずっと変化を経て今の隠岐の方言になっているわけです。ただ今の方言に至るまでに何にも影響も受けなかったというところではなくて、例えば近隣の方言の影響、だから五箇方言とか西郷の方言でずっと通せるわけではないんですね。隣の集落からお嫁に来たりとかいろいろコミュニケーションがあって、近隣の方言の影響を受けて、つまり影響を受けた方言が生まれます。

さらに大きいのは標準語、日本語の影響があって、その影響を受けた方言というのが出てきます。そうすると本当の純粋な方言というのはなかなか残ってこないですね。なるべくそこを我々は見たいんですけども、難しいところはあります。こういう状況がいわゆる危機であるということになります。

ここまででは研究の歴史についてですけど、私たちが調べたものに基づいてここからお話をさせていただきます。調査の報告というような形でお話をさせていただきますけれども、4地点だけで調査をしています。しかも今回出てくる例というのは非常に限られたものですので、同じ隠岐の中でも地域差とか年齢差というのがあると思いますから、皆さんが実際に話されているものとは違うかもしれません。ご自分がお話をされる隠岐弁とか方言との差を思い浮かべな

がら聞いていただけると面白いかなと思います。

隠岐方言はよく出雲方言の古い姿を残しているといわれることがあります。確かに私は出雲の方言を何年か研究はしているんですけども、近いなと思うところはあるんですが異なる部分も非常に多くあります。そういうところに注目しながら合同調査で得られたデータから特徴的な現象を取り上げていきます。

まず1つ目、動詞の活用ですね。古典語未然形というちょっと難しいですけど、要はこういうことです。否定の言い方、標準語では、書かない、寝ない、来ないみたいなふうに言います。あとは意志、何とかしようという形です。書こう、寝よう、来ようとか。あとは受け身の書かれる、寝られる、来られるみたいな言い方とか。あとは使役で、何とかさせる、履かせる、寝させる、来させる、こういう言い方が隠岐でどうなっているか、調査でどういう答えが返ってきたかということです。

例えば否定の形。過去の否定の形は、例えば「去年は年賀状は書かなかったよ」というのは、「キョネンワ ネンガジョーワ カカザッタ」とか「カカダッタ」という方言もあるんだと思いますけれども。とか、「去年は年賀状を出さなかったよ」というのは「キョネンワ ネンガジョー ダサダッタヨ」というお答えをいただきました。「書かなかった」のその「なかった」に当たる部分に「ザッタ」とか「ダッタ」というのが出てくるのは、1つの隠岐方言の特徴になります。

あと出てきたのは、「うるさくて嫌だった」。たぶん「好かなかった」ってことだと思うんですけど、「メンダナケ スカザッタ」という言い方を聞きましたね。これはこういうのをどう言いますかと聞いたわけじゃなくて、自然に会話している中でお聞かせいただいた表現です。

次に何とかしようという意志の形ですけど、例えば「疲れたからもう寝よう」というのは、「ツカレタケ ニョーヤ」という言い方をすると教わりました。「一緒に寝よう」というのは「イッシヨニ ニョーヤ」、これも「ニョーヤ」と言うんですね。あとこれはドラマのせりふみたいですけど、「死ぬときは一緒に死のう」というときは、「シヌトキワ イッシヨニ シナーヤ」という言い方をするんだと習ったというか教わったんですが。

さっきの「いのっずや」というのと一緒に、「死ぬ」というの「シノル」とか「シヌル」という言い方をするんじゃないかなと思って、このときは「シヌトキワ イッシヨニ シナーヤ」という言い方を教わったんですけど、もしかしたら死ぬときはと言うときは「シノルトキワ」とか「シヌルトキワ」とも言うんじゃないかなと思います。「ル」とか言わないのかもしれない、「シノートキワ」とか言うかもしれないけど。

今見た、意志とか勧誘の形というのを、標準語で書こう、寝ようなんていうのを、何とかだろーみたいな推測とか推量する意味では使えないんですね。標準語の場合は使いにくいんです。推量するときには書くだろーとか、寝るだろーというのが普通です。隠岐方言でも殺虫剤をかければゴキブリはすぐに死ぬだろーという「死ぬだろー」のところを、「シヌルジャラー」とか「シヌルダラー」みたいな標準語のだろーに当たるような形で言うこともあると教わったんですが。こんな言い方もあるよ、殺虫剤をかければゴキブリはすぐに「シナーズ」という。「死ぬだろーよ」というときをもうすぐ「シナーズ」という言い方もすると教わりました。

これは1つ標準語と非常に大きな違いではあるんです。都万で聞いたんですけど。あとこう

という言い方、実際どう使うのかというのはあんまり僕もちゃんと分かっていないんですけども一応出てきたものとして、「まだ寝るな」と言うのに「マダ ニョーツケ」と言う。「帰るな」と言うのを「イナーツケ」とか「カエラーツケ」と言うんだということを聞いたんです。違うと言われたら、もうそれまでですけど。もっと違う言い方があるんだということがあれば、それは教えていただきたいんですけど<sup>1</sup>。

「そんなところを探してもお金はありはしないぞ」って言うときに、「サガシタテテ アラーツケナ」という言い方をすると習いました。この「ツケ」という形、これがどういうふうに使われるのか、どういう意味合いなのかというのは、今言いましたように不勉強ですのでこれからちゃんと勉強していきたいと思います。

あと、この「来る」のいろいろな形があって、標準語の場合は来られる、これは受け身と使役が逆だ、コサセル、コラレル、コナイと全部「コ」ですね。都万で聞いたんだと思うんですけど、使役の「来させる」というのは「キサセル」。こんなに早くに「来られてしまった」というときは、「クラエル」。「ク」になる。否定「来ない」というときは「コン」、「コノ」になる。標準語は全部コ、コ、コなのに、隠岐は「キ」、「ク」、「コ」と形が変わるといふ。これも非常に興味深いものだなと思って聞きました。

あと、受け身の形を調査していたときに出てきたので、「～テ ゴス」というのを聞きました。例えば「こんなところに落書きを書かれると困る」というときに、「コゲナ トコニ カイテ ゴスト コマツケドナ」という言い方をします。「コゲナ トコニ カイテ ゴスト コマツケドナ」、これは「書かれる」に直接当たらない言い方なのかもしれませんが、「～テ ゴス」という言い方をすると。

これをたぶん標準語に直訳すると、「こんなところに書いてくれると困るんだけどな」みたいな。「くれる」に当たるものですけど、たぶん標準語でこれを言うとちょっと変というか、ここで「くれる」はなかなか出てこないんじゃないか。そういう意味でこの「ゴス」の使い方というのはより興味深いところです。

あと、さっきのお2人のお話の中でもいくつか出てきたんですけども、さっきの出てきた中で言うと「スタコイ」、ずるい、「スタケー」というそれと同じようなことですけど、「昔はよく船をこいだ」と言うのに、「ムカシハ ヨー フネオ ケーダ」と言う。これはさっきの「スタケー」とか、あとは「すごい」というのを「スゲー」と言ったりとか、「早くない」というのを「ハヤネー」、「ハヤーネー」と言ったりとかというのと同じような現象の1つで、標準語のオイとか、アイに当たるものが「コイ」というのが「ケー」になる、「ゴイ」が「ゲー」になる「ナイ」というのが「ネー」になるということです。

---

<sup>1</sup> 講演後、聴衆の方から、「～ツケ」という言い方は、「帰るな」などの禁止にあたる言い方ではなく、むしろ「帰るな」と言われた者が「帰りはしないぞ!」という時の言い方にあたるとの指摘を受けた。神部宏泰(1979)『隠岐方言の研究』pp. 153-157にも、「特殊な否認表現」として同様の記述がある。調査データの解釈に際して平子の誤った解釈をしたということである。講演録中の注という形ではあるが、訂正させていただき、誤りを御指摘して下さった聴衆の方に感謝申し上げます。

標準語の形から見るとちょっとえっというのがある、例えば「出した」というのを「データ」と言う。手紙「出したよ」と言うのを、手紙「データ」と言うとか、起きる時間になったら「起こしてくれ」というのを起きる時間になったら「オケーテゴシェヨ」。ここでも「テー」とか「ケー」という形が出てくる。なまりと言われるとそれまでですけどこういうのは何かかなと思うと、おそらく「出した」というのは「ダイタ」という形がもとにあって、それから「データ」と。「起こして」というのが「オコイテ」という形になって、そこから「オケーテ」という形になったんじゃないかなと考えています。

あと、こういうのも出てきました。「まだ書かなくてもいいよ」、「マダ カケーデモ エーワナ」。「まだ行かなくてもいいよ」、「マダ イケーデモ エーワナ」。「まだ来なくてもいいよ」、「マダ ケーデモ エーワナ」。中村でお聞きしたんですけど、たぶんもともと「カカイデモ」とか、「イカイデモ」、「コイデモ」という言い方なのかなと思います。もしかしたら全然違うのかもしれない。

けど同じような表現で都万では「カカーデモ」と言うんだと。ここでちょっと地域で言い方が違う。もしかしたら皆さんの話す隠岐の方言、ご自身の言葉ではもっと違う言い方があるのかもしれないけど、こういう言い方があると。これも、さっき見たこの「コイダ」というのも「ケーダ」と言うのと何か同じような現象が起こっているのかなと思っています。

その他にもいろいろとありますけれども、いわゆる形容動詞というのがあるんですけど、「静かだな」と標準語は言う。こちら辺は「静かだなあ」と、「ダ」と言うんですけど、「シズイカナナア」って、ここに「ナ」が出てくるということ。「静かでない」というのは「シズカニネーダガノ」。ここに「ニ」が出てくるとか、「有名だったよ」というのを「ユウメイナカリヨッタ」という言い方をする。「ユウメイナカリヨッタ」という言い方をするというのはまた聞きですけど、こんな言い方もあって、これも標準語とは違うし、実は「シズカナナア」みたいな言い方は先ほど言いましたけど、出雲と隠岐はちょっと近いかもしれないと話をしました、出雲の方でも聞かれたりします。

「ユウメイナカリヨッタ」みたいな言い方は、四国の方でも使えることがあるということ、物の本で読んだ気がします。そういう中で見ていくと隠岐の方言がどういう特徴で、日本の方言の中でどういう位置付けにあるのかということが分かってくるのかなと思います。

淡々と話ただけで申し訳ないんですけど、まとめに入らせていただきます。ここまで見たのは動詞とかそういう、ちょっと難しい話ですみませんが、隠岐方言にはまだまだ分からないことがたくさんあるんですね。私としての1つの目標というか目的、勝手な夢ですけど、全部島前島後、全部というのがどういうふうに分けて何個隠岐に方言があるのかということも難しいんですけど、その全部の方言についてできるだけ詳しい辞書、単語集を作って、それと文法集ですよ、どういう文法ですかというのを分かるものを作って、その2つを使えば読めるテキスト、教科書というに変ですけど読本を作る。そうすると後世になって、後になって、あ、こちら辺の方言はこういうふうなものなんだということがよく分かる、こういうことをしたいと。これが1つの目標です。

それともう1つ、もっと大きい私の目標は、隠岐の方言が日本の中でどういう位置付けにあるかということを知りたいんですね。例えば先ほどから言っているように出雲の方言とどうい

う関係にあるのか。今までは出雲の方言の古い姿を隠岐は残しているところがあるということはいわれてきたけど、じゃあ、実際どういうところが古くて、ここは古くない、もしかしたら隠岐の方言の方が出雲よりも新しい部分があるかもしれないですよ、そういうところを調べていきたい。

あとはさらにそのほか、山陰方言、岩見とか伯耆の方言との関係はどうなっているか。この後休憩を挟んだ後の友定先生のお話の中でも少し触れるところがあるかもしれませんが、そういう中での位置付け。

次に、さらにもっと大きく見て、西日本の方言の中で隠岐というのはどういう方言なのかという。隠岐だけではないんですけども、いわゆる雲伯方言と呼ばれている出雲と伯耆の国の方言、あと隠岐を含めた方言は、西日本の方言の中でも非常に特徴的な方言だということは昔からずっといわれています。西日本の中にあるんだけど、何か東日本っぽい要素がある。東日本の方言っぽい要素があるというのはずっといわれていることで、じゃあ、それはなぜか。ほかの西日本方言とはどういうつながりなのかということをも明らかにしたい。

それで最終的には全国の方言の中で隠岐方言というのがどういう位置付けを占めるのか、もしかしたらもうとても古い、日本の中でも最高級に古い特徴のある種残しているところもあるかもしれないし。そういうことを明らかにしたいと思っています。

時間をあまり管理してないんですけど、こんな形でまとめさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

(司会) どうもありがとうございました。またいろいろ教えていただければと思います。今日もいくつか例が出てきましたので。

それではここでちょっと休憩を入れたいと思います。